

音楽経験の場としての学校図書館 — 鑑賞および読書の活動「音楽ブックトーク」を中心に —

The School Library as a Place for Musical Experiences: Music Booktalking where Music and Stories Meet

杉山 悦子 齊藤 豊 吉岡 裕子

SUGIYAMA Etsuko, SAITO Yutaka and YOSHIOKA Hiroko

1. はじめに

格差社会といわれる現代において、子どもたちの教育をどのように保障するかが問われている。問題とされているのが、出自や環境など、本人には責任がない要因によって差が生じる「機会の不平等」である [宮寺 2011]。自律性や主体性を求めている旧来の教育方法では、出身階層によって学習意欲に格差が生まれ、学ぶことから自ら降りた階層下位出身者は放置されると指摘されている [荻谷 2001, 2002]。

生育環境は音楽の嗜好性をも左右することが、すでにブルデューにより明らかにされている [ブルデュー 1989 (1979)]。日本人を対象とした音楽 CD の消費調査では、世帯収入や学歴の高い層は多様なジャンルを消費する「オムニボア (omnivore)」の傾向があり、一つのジャンルのみを聴く「ユニボア (univore)」は、低い文化資本層にみられる傾向があると報告されている。このなかでは、クラシック CD は世帯収入の高い層が所有する傾向にあり、学歴の高い層はクラシックよりもジャズとワールド・ミュージックなどを好むこと、そして低い文化資本層はアイドルを選択する傾向にあるとしている。同調査は都市部におけるものであるため、全国的な傾向とするには限界があるものの、経済的にゆとりがあればあるほど、様々な音楽に触を伸ばせることを示し、ゆとりのない家庭では音楽ジャンル選択の幅が狭まる可能性を示していると言えよう。

文化や芸術を享受する機会を保障することは、世界の共通認識である。1989年に採択されたユネスコ国連憲章子どもの権利条約では、第31条に「文化的な生活及び芸術に自由に参加する権利」や「文化的及び芸術的な活動並びにレクリエーション及び余暇の活動」のための「平等な機会」を提供することが奨励され、第13条では、児童が「口頭、手書き若しくは印刷、芸術の形態又は自ら選択する他の方法により、国境とのかかわりなく、あらゆる種類の情報及び考えを求め、受け及び伝える」権利を有すると提言されている [日本ユニセフ協会]。ここでは、多様な情報や考えを媒介する文化や芸術に子どもたちが「参加する権利」があると謳われている。

音楽は作曲家・演奏家・聴衆の3つを必要とする [海老澤ほか 2002]。聴衆は音楽を成立させるアクターであり、「聴く」という行為は音楽活動への「参加」である。たとえば、フランスの港町で1995年に誕生した「100万人を動員した奇跡の音楽祭」ラ・フォル・

ジュルネでは、聴衆が同時開催のクラシックコンサート¹を「ハシゴ」することができ、「自分の趣味に合わなければためらわず中座」し、「素晴らしい演奏には涙をうかべ、立ち上がって歓声」をあげる。巨匠作曲家というラベルに頼らずに感性で選ぶ「軽やかな」聴衆 [渡辺 1989] と、それに応えようとするアーティストがコミュニケーションする同音楽祭の仕掛けは、音楽産業界に対する一つの挑戦である [高野 2014]。かつてデュイーは、レコード鑑賞を、メディアを媒介とした美的「経験」の一つとした [上野 2003]。鑑賞することを音楽経験と捉える考え方は、音楽に情操陶冶・人格形成を期待してきた日本の教育観²とは異なるものである。

表現活動や美的経験の源泉となる音楽を、学校の授業や行事で使われる曲以外で子どもたちはどの程度聴くことができるだろうか。児童生徒が自由に扱える鑑賞機器が音楽室に置かれることは多くなく、ほとんどの学校では、CDなどの音楽ソフトは子どもの目が届かない教員室の棚に収められる。子どもたちには、教師用書架で尚且つ閉架状態にある音楽視聴資料を請求する権利は与えられていない。それでは学校図書館はどうだろうか。音楽を聴くことのできるシステムを構築している学校は、私立学校や高校図書館などを除いて多くはない。学校図書館法第二条では、印刷資料のみならず視聴覚資料を収集することが謳われているものの、実質的には非印刷資料まで要請されているわけではないためである。たとえば、5カ年ごとに延長されている学校図書館メディア整備事業では視聴覚資料を予算化しておらず³、そもそも学校図書館の全国調査においても視聴覚資料は対象とされていない⁴。戦後の学校図書館では、公共図書館の児童サービスとともに、教科書や副読本のみでは補えない多数の読書材を提供し、子どもの読書が広がることを支援してきた。しかし一方で、視聴覚資料については等閑視してきたと言わざるを得ないのである。つまり、音楽科教育、学校図書館の双方において、子どもたちの音楽視聴資料へのアクセスを置き去りにしてきたといえる。

以上のような問題意識をもちながら本稿では、小学校で行われている音楽ブックトーク活動を取り上げたい。音楽ブックトークとは、音楽鑑賞とブックトークを組み合わせた活動である。物語に登場する音楽を紹介したり、あるいはテーマ設定の下で数種類の曲や物語を伝えたりすることによって、未知の音楽や本との出会いが意図されている。東京学芸大学附属世田谷小学校の齊藤豊教諭と吉岡裕子学校司書によって考案され、2014年から総合的な学習の時間等を用いて実施されてきた。

音楽ブックトークの大きな特徴は、音楽と本を並列的に紹介していくことである。これまでも「読み聞かせ」でBGMを流したり、楽器演奏と組み合わせたりする活動は存在していた。しかし、音楽付きの「読み聞かせ」では、本が主で音楽が従となる場合が少なくなく、楽器や合唱などの組み合わせは、発表会やイベントとして行われる場合が少なくなかった。音楽ブックトークは音楽鑑賞が自立的であること、通常の授業や日常的な学校生活のなかで実施できる点が既存の活動との大きな違いである。もうひとつの特徴は、音楽教員と学校司書が対等な立場で展開されることである。進行役のメインやサブといった役割を振らずに、2人で会話を重ねながら、曲の紹介を音楽教員が、本の紹介を学校司書が行っていく。つまり音楽ブックトークは、音楽の専門家と本の専門家がそれぞれの専門について語る、いわばソリスト同士の二重奏といえる。

本稿では、音楽鑑賞教育と図書館との関連を歴史的に捉え、学校図書館が音楽鑑賞活動

を支援することが可能かどうかを検討する。可能であれば、どのような支援が考えられるのか、音楽ブックトーク活動をふまえて提示していきたい。次章では、学校教育のなかで視聴覚資料を用いることを想定していた音楽鑑賞教育の歴史的経緯を確認し、なぜ学校のなかで音楽アクセスへの目配りが無いに等しかったのか、その背景を探る。3章では、実施者である学校司書と教師について述べ、音楽ブックトークとはどのような手法か、そして音楽ブックトーク活動の流れと図書および楽曲を紹介する。4章以降で、学校図書館による音楽鑑賞活動支援について考察し、今後の展望を述べたい。授業案と図書・曲リストおよびインタビューの掲載は、すべて音楽ブックトークの実施者である齊藤豊教諭と吉岡裕子学校司書の許可を得ている。本稿における「筆者」とは杉山であり、執筆の責任を負っている。

2. 戦後の音楽鑑賞教育と図書館

戦後日本の音楽科教育は、その初期において鑑賞教育の充実を目指していた。1951年に発表された第2次学習指導要領「試案」の「付録」〈鑑賞用音楽レコード〉リストには、日本を含む各国の古典から現代曲、民謡、わらべうたまで、小学校200曲⁵、中学校・高等学校80曲⁶以上の曲名が示されていた。「付録」には〈鑑賞用音楽レコード〉の次に〈参考書〉のリストも作成されており、その最後に「注」として次のように記載されている。

〔注〕ここに示したレコードと参考書の目録は、日本図書館協会および全国学校図書館協議会によって選ばれたものである⁷。

学習指導要領「試案」における〈鑑賞用音楽レコード〉と〈参考書〉の選択は、日本図書館協会と全国学校図書館協議会によるものであった。中学校の指導要領では、「この目録は、日本図書館協会および全国学校図書館協議会の協力により、多数の委員によって選ばれた（傍点は筆者による）」⁸とされているものの、1950年代の音楽科教育の教材選択に、図書館界が大きくかかわっていたことに相違ない。

図書館関係者が作成に参加した〈鑑賞用音楽レコード〉は、小学校、中学校・高等学校ともにそれぞれ3つの目録が作られている。小学校用は「演奏形態による分類」「楽曲の種類による分類」「学年による分類」、中高校用では「演奏形態による分類」「音楽史による分類」「民謡による分類」である。それぞれの分類は表になっており、第一列目に五十音順の曲名が並び、第二列目以降の各項目は、順に「作曲者」「演奏者」「レコード種別」「楽器の種別」「学年」と記載されている。「レコード種別」とは、レコード会社、大きさ、そして面のことで、たとえば「C. 12" . 2.」は、コロムビアの12インチ2面というように、レコードの情報が詳細に記載されている。最終列に示された「学年」の項目は、低・中・高学年の緩やかな区分である。尚、【表1】では各分類と曲の合計数のみ示した。

鑑賞用の音楽レコード目録の存在は、1947年第1次指導要領から認められ、「鑑賞レコード教材一覧表」の中にある「鑑賞用音楽レコード一覧表」（以下、一覧表とする）として、小学校では101曲、中学校では76の曲が示されていた⁹。しかし1947年と51年の

差は大きいと言わざるを得ない。なぜなら、47年の一覧表は名称こそ「表」とされているものの、小学1年生から中学3年生までの対象学年ごとに資料名が並べられているだけの文書だからである。かろうじて楽器形態ごとの括りであるものの、作曲家や演奏者などの各項目は曲名と一緒に記載されているため、授業者が作曲家や演奏者を探し出すのは容易ではないとみられる。また、1年刻みで聴かせるレコードを振り分けていることから、選択の幅は限定的である。一方、1951年の第2次学習指導要領〈鑑賞用音楽レコード〉の目録（【表1】）では、音楽学の観点から曲を選択できる工夫が施されている。たとえば第1表「演奏形態による分類」では、楽器形態が独奏、重奏、合奏に分かれ、それぞれが楽器ごとに区分されているため、生徒に聴かせたい楽器を基準にして曲目を選ぶことが可能である。第2表「楽曲の種類による分類」では、2拍子の行進曲、3拍子の舞曲、いくつかの小曲からなる組曲など16種類に整理され、変奏曲を聴かせたい場合、あるいは民謡を聴かせたい場合など、すぐにこの目録から候補曲を探し出すことができる。曲名は五十音配列であるから、検索する際に同名のタイトル曲が複数の作曲家によって作られていることも知ることができる。「アベマリア」は、シューベルト、グノー、ビットリアによる3種類の曲がある、というようにである。選択肢の広さは演奏者標目にも及び、たとえばウェーバーの「舞踏への勧誘」を、授業者はベルリン・フィル、フィラデルフィア・フィル、あるいはロンドン・フィルから選択することができる。同じ曲を異なる演奏者で比較することも可能であろう。

この当時、音楽教育におけるレコードの多用に備えるべく、レコード分類を考案した人物がいた。元公共図書館司書の小川昂である。小川は、楽器の種類や音楽史を重要視し、学術的な分類目録の作成を目指した。目録を検索することで、生徒や教師が自然に音楽史や楽曲を知ることができると考えたのである。彼にとっての分類目録は、整理に役立つだけでなく、教材としての役割を兼ね備えるものであった〔杉山 2014〕。指導要領には小川の名前は確認できないものの、当時小川が音楽教育界や学校図書館界にかかわっていた〔小川 1950, 1952〕ことから考えると、第2次学習指導要領〈鑑賞用音楽レコード〉目録への彼の関与は十分に考えられる。

学術性と選択可能性をもつ第2次指導要領における目録とはうって変わり、1958年の第3次指導要領以降のレコード目録は、性格が異なるものへと変質してしまった。厳選された鑑賞曲が「共通教材」として必修化されたためである。小学校6年間で18曲、中学校3年間で21曲に厳選され¹⁰、以降1998年の改訂で鑑賞曲の共通教材が廃止されるまで、「全国民が同じ楽曲を鑑賞する制度が確立」〔西島 2010〕したのであった。ただし、「共通教材」以外の曲を年に数曲、教師が選択して聴かせることも残されていた。西島によれば、文部省は第3次指導要領告示の翌年に「小学校・中学校音楽鑑賞教材例について」（以下、「教材例」とする）を通達し、約100曲以上の曲群を、共通教材以外の選択曲として示している¹¹。しかし目録に関していえば、「教材例」は先の第2次指導要領の〈鑑賞用音楽レコード〉目録とはまったく異なり、作曲家の五十音順と国別で引く分類表となってしまった¹²。つまり、楽器別や演奏者別で選び出すことが不可能な目録になってしまったとみられる。ここには図書館界が関与した形跡はみられず、さらに目録が変更された背景としてレコード企業のシェア争い¹³が報告されていることから、拘束化された目録が音楽産業界の介入と無縁ではない状況が垣間見える。第2次指導要領には掲載されていたグレ

【表1】第2次学習指導要領における〈鑑賞用音楽レコード〉目録

小学校学習指導要領音楽科編（試案）昭和26年（1951）改訂版 付録

第1表 演奏形態による分類（鑑賞用音楽レコード）

I 声楽	(A) 独唱	22	
	(B) 重唱・輪唱・合唱	27	
II 器楽	(A) 独奏	(a) 弦楽器	23
		(b) 管楽器	13
		(c) 鍵盤楽器	19
		(d) 打楽器	3
	(B) 重奏	(a) 二重奏	2
		(b) 三重奏	9
		(c) 四重奏と八重奏	6
	(C) 合奏	(a) 弦楽合奏	1
		(b) 吹奏楽	16
		(c) 管弦楽	64
	(D) 各演奏にわたるもの	7	

(単位：曲タイトル数)

第3表 学年による分類（鑑賞用音楽レコード）

I 低学年	34
II 中学年	75
III 高学年	100
IV 各学年共通	7

(単位：曲タイトル数)

参考書

教師用	I 教育原理	4
	II 音楽理論	30
	III 音楽史	23
	IV 音楽教育論と指導書	20
	V 辞書	4
	VI その他	14
児童用		4

(単位：冊数)

中学校高等学校学習指導要領音楽科編（試案）昭和26年（1951）付録

鑑賞用音楽レコード

第I類 演奏形態による分類		
I 声楽	1 独唱	12
	2 合唱	15
	3 重唱	2
II 器楽	1 独奏	9
	2 管弦楽	19
	3 室内楽	4
III その他		2

(単位：曲タイトル数)

第II類 音楽史による分類	
中世期→18世紀	21
ベートーベン以後（ロマン派→現代）	43

(単位：曲タイトル数)

第2表 楽曲の種類による分類（鑑賞用音楽レコード）

I 声楽	(A) 歌劇	9	
	(B) 歌曲 [聖歌を含む] [77]	21	
	(C) 民謡	22	
	(D) わらべうた	8	
II 器楽	(A) 無題*	(a) 描写楽	14
		(b) 標題楽	17
	(B) 無題*	(a) 行進曲	13
		(b) 舞曲	45
		(c) 組曲	6
		(d) 序曲	7
		(e) 前奏曲	2
		(f) 間奏曲	3
		(g) 即興曲・幻想曲	3
		(h) 抒情小曲	16
		(i) ソナタ	4
		(j) ロンド	2
		(k) 変奏曲	6
		(l) フーガ	1
		(m) 交響曲	3
		(n) 協奏曲	1
		(o) 邦楽	2
		(p) その他	7

(単位：曲タイトル数)

文部省「小学校学習指導要領音楽科編（試案）昭和26年（1951）改訂版」より筆者が集計した。

*は筆者による加筆である。

第III類 民謡による分類

26

(単位：曲タイトル数)

参考書

教師用	I 教育原理	2
	II 音楽理論	19
	III 音楽史	6
	IV 音楽教育論と指導書	14
	V 辞書	3
	VI その他	9
生徒用		30

(単位：冊数)

文部省「中学校高等学校学習指導要領音楽科編（試案）昭和26年（1951）」より筆者が集計した。

ゴリオ聖歌や、ジャズの影響が強いガーシュインの曲が目録から消え、鑑賞曲は音楽史的にも幅の狭い範囲から選ばれることとなった。

1998年に共通教材が廃止されるまでの40年もの間、日本の音楽教員が鑑賞教材を自ら選ぶ必要がなくなり、学校現場では決められた曲、あるいは教科書に準拠するCDを聴かせることで鑑賞教育が成立したのである [齊藤・杉山 2005]。その結果、戦後日本の鑑賞教育は「失敗」だったと評価されるに至る [西島 2010]。

3. 小学校における音楽ブックトークの活動

この章では、東京学芸大学附属世田谷小学校で行われた音楽ブックトークの活動を説明していきたい。まずは実施者である吉岡裕子学校司書と齊藤豊教諭について述べ、次に両者が生み出した音楽ブックトークの活動について説明する。

3.1. 実施者について

吉岡裕子学校司書は、東京学芸大学附属世田谷小学校に長年勤めてきたベテラン司書である。学校司書は、公共図書館や大学図書館の職員とは異なり、図書館内のすべての業務をおおむね一人でこなさなければならない。そのうえで、公共図書館の児童サービス担当者同様、年間約5千点¹⁴が出版される新刊児童書を把握して子どもや教員等に提供することが求められる。さらに学校司書の場合、本の把握にとどまらず、子どもたち一人ひとりの性格や教師の授業スタイルにも気を配ることが必要とされる。同校の図書室（同校ではメディアルームと呼称している：筆者注）の位置づけを表す一例を挙げたい。あるとき数名の男子児童が小さな虫をガラスの器に入れて「新種だ！」と来館した。図鑑やインターネットで調べたところ、新種ではなくギンメッキゴミグモと判明する。その後も虫の持ち込みは続き、吉岡が追加購入した昆虫関連図書から、子どもたちは種類を特定していったという [吉岡 2014]。子どもが昆虫を図書室に持参したということは、疑問があれば図書室に行くこと、図書室に行けば何かわかるかもしれないという信頼が子どもたちに浸透していたということに他ならない。吉岡司書の行う知的好奇心への誘いは図書室のディスプレイにも表れ、壁面に対して斜めに配置した書架は、遊びの空間をも演出する [吉岡 2015]。また、絵本を読むカーペット敷きのスペースの一角に高学年向けの児童文学全集をあえて並べ、「普通の本屋さんには並んでない本」への飛躍を待つのである¹⁵。

音楽教科を専門とする齊藤豊教諭は、これまでに音楽劇におけるイメージ作りのために、学校司書のブックトークを授業に組み込んできた [齊藤 2009] [中山 2011]。齊藤自身が図書館ユーザーで、レファレンスを受けて司書の専門性に驚愕した経験をもつ¹⁶。齊藤教諭の授業スタイルは、「子どもとの対話」である。達成すべき目標を設定することを常とする学校教育において齊藤は、「子どもたちに指摘し指導するのではなく」、子どもたち自身が「解決すべき課題」を認識し、彼ら自身の成長を促すと述べる。たとえば太鼓による音楽づくりの学習では、教師が学習の仕上げとしての発表会を提案するのではなく、「この活動をどうやって終わりにしようか」と子どもに問いかけ、全校生徒に聴いてもらうという選択を引き出して「サプライズ演奏会」を開催するのである [齊藤 2016]。ここ

で重要なことは、子どもたちにすべての決定権を委ねるわけではなく、教師が方向性を見失わずに子どもたちと対話を重ね、彼らの意思を尊重しながら進めていく点にありたい。さらに子どもたちからのフィードバックを採り入れながら、授業とその先の活動を創り上げていく方法は、教師側に自身の授業を省察させることを要請し、必ずしも授業計画が教師の思惑通りにいかない厳しさを合わせ持つと思われる。子どもたちとともに作っていく齊藤の授業スタイルは、自身がオーケストラ団員として演奏活動を続けていることの反映にもみえる。

3.2. 音楽ブックトークとは

ブックトークとは、「あるひとつのテーマにそって数冊の本を順序よく」紹介する方法で、1冊をじっくりと読んで聞かせるストーリーテリングや「読み聞かせ」とは異なり、グループの利用者を前にして、話題をつなげながら数冊の本を紹介していく手法である。「いろんな本があること」、「ある事柄を知るにはいろんな方面からみることができること」、「どの子も楽しめる本が必ずあるものだ」ということを知らせ、子どもと多くの本を結びつけることが目指される〔塩見・間崎1976〕。多くの作品の存在を知らせることによって、多角的なものを見方を養おうとするブックトーク¹⁷に、音楽鑑賞を組み入れたのが「音楽ブックトーク」である。



齊藤教諭によれば、音楽ブックトークの原点は生徒との対話だったという。「ぼく、村上春樹を読んでいるんだ」と話しかけてきた小学6年生に、「ジャズも聴くの?」と応答したことがきっかけだった¹⁸。齊藤は「音楽ブックトーク」活動案のなかで次のように述べる。

音楽が小説の中で語られているものがある。たとえその曲を知らなくとも物語を追うことができるし、十分楽しめる。しかし、そこに描かれている曲を知っていれば、その物語の中に自分が入り込んで主人公に寄り添うことができたり、作者がそこに込めた秘密に気づくことができたりするかもしれない。本と一緒に音楽を鑑賞したら、これまでの鑑賞の授業をもっと楽しくできるかもしれない¹⁹。

音楽と文学を分かちつのではなく共に活かすことによって、鑑賞と読書の相互作用を目指していることがわかる。

齊藤教諭と吉岡司書は、音楽ブックトークの活動を次の4つのタイプに区分している。

- A 「物語のあらすじと、その中で鍵を握っている音楽を一緒に聴く」
- B 「テーマに沿って、物語や音楽で綴っていく」
- C 「キーワードをあげて、本や音楽でイメージを共有していく」
- D 「緩やかなテーマのもと、音楽と本や絵本を並べて紹介する」

次節で取り上げる音楽ブックトーク「曲と楽器と物語」は、作品中に具体的な曲名や楽

器等が登場する A プランである。作品中に音楽が登場しない本の場合は、B～Dのように、授業者がテーマ等を設定する。

教諭と学校司書の態勢は、お互いに顔を見合わせることでできる角度を保ちながら、子どもたちと向かい合うように着席する。学校司書は、教師の背後や脇に待機するのではなく、教師の横で授業に参画する。2人の授業者の姿勢が、文学と音楽の対等性へと結びついてるようにみえる。

【表2】は、齊藤教諭と吉岡司書による音楽ブックトークで紹介された図書と楽曲リストである。これまでに8種類のテーマで実施された。

3.3. 音楽ブックトークの事例①

2014年9月12日に音楽室で実施された音楽ブックトーク「曲と楽器と物語」(【表2】(2)、【表3】)では、音楽から始まり会話をはさみながら物語が語られ、物語からまた音楽へと誘いながら曲の解説や楽器の説明が織り交ぜられた。紹介された文学作品は、どれも音楽がモチーフとなっている。『第二音楽室』の「FOUR」では、リコーダーアンサンブルに誘われた中学生の等身大の心情が描かれ、『きらめいて！ハッピージャズ』は、クラスで力を合わせてステージを目指すストーリーである。小学5年生の生徒たちにしてみれば、これらの小説には自分たちと年の近い人物が登場し、学校という身近な舞台が設定されている。つまり、作品中に登場する音楽が、時代や国を超えた特別なものや教養としてではなく、彼らの生活の延長線上にあるものとして提示されるのである。注目されるのは、フランスの作曲家オリヴィエ・メシアンのオルガン曲がモチーフの『聖夜』という小説である。20世紀音楽の巨匠でありながら日本の楽壇ではほとんど取り上げられないメシアンの曲に、男子高校生が挑むストーリーである。母親の家出や父親との関係に悩む彼の前に立ちはだかるのが、超絶技巧を要するメシアンのオルガン曲という設定である。司書のトークの後、生徒たちはDVDを視聴し、いかに演奏が難しいのかを目と耳で実感する。その後、彼らは齊藤からパイプオルガンの音が出る仕組みや、四肢を使う奏法の説明を受け、再度鑑賞する。筆者が参観したときには、生徒たちは身じろぎせずじっと聴き入っていた。彼らは、西洋古典主義者が問題にしがちな無調性や非和声性という「難解さ」を、ブックトークを介することによって軽々と乗り越えてみせたのであった。

3.4. 音楽ブックトークの事例②

次に取り上げる事例は、小学1年生を対象に図書室で実施された音楽ブックトーク「やさしいオオカミだっているんだよ」(【表2】(8)、【表4】)である。授業は、2017年8月21日に同校で開催された「夏の教育研究セミナー」で公開された。

授業は、司書の読む本がよく見えるように、子どもたちに前方の中央へ集まってもらうことから始まった。子どもにとって「読み聞かせ」は、リラックスしつつ集中して「聴く」体勢をとることから、子どもたちに緊張を強いることなく音楽鑑賞を始められるのが音楽ブックトークの利点と考えられる。近年の図書室は、カーペットやマットなどを敷いたスペースが設けられつつあるため、床に直に座って聴く場合、図書室は一般教室よりも子どもへの負担も少ないのではないかと思われた。

「やさしいオオカミだっているんだよ」は、動物が登場する物語や音楽を使いながら進

行していく、低学年に理解しやすい「読み聞かせ」を多用した音楽ブックトークである。齊藤の「あんな感じかな、こんな感じかな、って思いながら聴いてごらん」という指示の後に流される『ワルツィング・キャット』は、3拍子のゆったりとしたテンポに猫の鳴き声がヴァイオリンで表現される、音楽教育の鑑賞曲として長年愛用されてきた曲である。たっぷりと歌われるメロディーと、テンポが微妙に揺れ動く部分を聴いた後、齊藤が子どもたちに「どんな猫かな?」と問いかけると、「白い猫」、「おしゃれな猫」、「しっぽがにゅ〜っとしている猫」など、曲の雰囲気表現する回答が出た。これらは、「音楽を感じ取ったことや想像したことなどを伝え合い共感」し、「音や音楽及び言葉によるコミュニケーション」²⁰を取ることが実現されているようにみえた。

齊藤の選曲と、吉岡の「読み聞かせ」の実演が活かされたのは、最後の『オオカミくんはピアニスト』を読み聞かせる部分であった。同書は、カモメから演奏依頼の手紙が舞い込んだ孤高のピアニストのオオカミが、自らのピアノを運んで演奏を届ける物語である。クライマックスは、オオカミの奏でるピアノの音色が、まるで花のように舞い踊る場面である。それまでの暗いページが色彩豊かなページに移るとき、吉岡司書の呼吸に合わせるように齊藤がCDのプレイボタンを押した。ここで齊藤がこだわったのは、“花のワルツにもとづくパラフレーズ”というオーケストラで有名な「花のワルツ」をピアノでアレンジした曲であった。1人で弾いているとは思えない高音から低音までの豊かな響きと、繊細なタッチの織りなすマーティン・ジョーンズによるピアノの音色が、オオカミの周りにそれこそ花のように広がっていくことをイメージさせる曲である。鑑賞後は、「それぞれが物語の続きを想像できるように」静かに授業を終えた。子どもたちに感想を要求しない「読み聞かせ」の手法が、音楽鑑賞に生かされた瞬間であった。

音楽ブックトークを実施するための注意点を次に挙げる。音楽を聴く設備について齊藤教諭は、子どもたちに聴かせる音源は音質の観点からCDとコンポが望ましいとする。ラジカセやパソコンからの視聴では、音質的に限界があるためである。この日はミニコンポを持ち込んだの実施であり、スピーカー次第では、Bluetooth を使った再生も有効とのことであった。ただしネットからのストリーミングは、検索したり視聴したりする分には耐え得るものの、再生のタイミングが不安定で授業の流れを止めてしまうことが往々にしてあるという。さらに著作権の問題もあると指摘する。

ハード面、ソフト面に対する知識と整備が必要となる音楽ブックトークの最も重要かつ難しいことは、子どもたちが集中して音楽に耳を傾ける環境の用意と思われる。筆者は、別日に普通教室で実施された音楽ブックトークを参観したが、廊下を歩く人や窓から聞こえる音など、思いのほか視覚的・聴覚的情報が集中を妨げることを痛感した。外部からのノイズが音楽鑑賞への集中を遮断することは言うまでもない。一方、公開授業の実施日が夏休みであったため即断はできかねるものの、普通教室から距離を置き本の詰まった図書室は、少なくとも一定の静けさが確保されているように思われた。このため後方にいる参観者には聴こえにくい小さな音量でも、子どもたちはじっと耳を傾けることができていた。

物語との結びつきが求められる音楽ブックトークでは、曲や演奏者を選ぶのは司書ではなく教員に任される。たとえ曲名が小説内に登場しても、演奏者は誰にするか、曲のどの部分を聴かせるのか、などという点は、音楽の専門家でないと選択は困難だからである。

【表2】音楽ブックトーク活動の曲・図書リスト

各表には、テーマ名、実施場所、タイプ別（本文3.2を参照）を示した。表内の丸数字は、紹介する順序である。

(1) テーマ「曲を聴けば物語はもっとおもしろい」図書室 Aタイプ

図書	音楽
①森絵都『アーモンド入りチョコレートのワルツ』	② J.S バッハ “ゴールドベルグ変奏曲” (ピアノ：グレン・グールド)
	③ J.S バッハ “ゴールドベルグ変奏曲” (チェンバロ：ピエール・アンタイ)
	④ E. サティ “アーモンド入りチョコレートのワルツ” 「短い子どものお話」より (ピアノ：小川典子)
⑤伊藤たかみ『ぎぶそん』	⑥ “Appetite for Destruction” (Guns and Roses)

(2) テーマ「曲と楽器と物語」音楽室 Aタイプ

図書	音楽
①佐藤多佳子『第二音楽室』	② J.S バッハ “G 線上のアリア” (ヴァイオリン：イル・ジャルディーノ・アルモニコ)
	③ J.S バッハ “管弦楽組曲 第3番よりアリア” (②と同曲) (リコーダー四重奏版)
③竹内もと代『きらめいてハッピー・ジャズ』	④ “Water Melonman” (Rudy Van Gelder Edition)
⑤佐藤多佳子『聖夜』	⑥ O. メシアン “主の降誕”

(3) テーマ「音楽は世界を変える力がある」音楽室 Cタイプ

図書	音楽
①北村得夫『歌が世界を動かした！：ウィ・アー・ザ・ワールド物語』	② “We are the World” (USA for Africa)
③パム・ムニョス・ライアン『マリアンは歌う』	④ “Marian Anderson Sings at Lincoln Memorial” (Marian Anderson)

(4) テーマ（指揮者って何をしているの？）音楽室 Cタイプ

図書	音楽
①二ノ宮知子『のだめカンタービレ』	② ドラマ “のだめカンタービレ” [DVD]
③アンドレア・ホイヤー『ぼくとオーケストラ』	④ L.v. ベートーヴェン “第九交響曲 より四楽章” (指揮：クラウディオ・アバド, ベルリン・フィル)

(5) テーマ「音楽で伝わることは…人と音楽と戦争と」音楽室 Bタイプ

図書	音楽
①宮沢賢治『セロ弾きのゴーシュ』	④ W.A. モーツァルト “アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク”
②デイビッド・マクフェイル『もぐらのバイオリン』	
③マイケル・モーバーコ『モーツァルトはおことわり』	
⑤チャナ・バイヤーズ・アベルス『おもいだしていただきあのこどもたちを』	
⑥ルース・バンダー・ジー、ロベルト・インノチェンティ『エリカ：奇跡のいのち』	
⑦カレン・レビン『ハンナのかばん』	
⑧アニタ・ローベル『きれいな絵なんかなかった』	
⑨安宅温『ひびけ青空へ！歓喜の歌』	
⑫香川宜子『アヴェ・マリアのヴァイオリン』	⑪ L.v. ベートーヴェン “第九交響曲 より四楽章” (指揮：クラウディオ・アバド, ベルリン・フィル)
	⑬ F. シューベルト “Ave Maria” (ジョン・キョンファ)

音楽経験の場としての学校図書館

(6) テーマ「ロンドンってどんなところかな」学級教室 Cタイプ

図書	音楽
①シェイクスピア『ロミオとジュリエット』(導入の話題として)	②J. ダウランド “珍品はいかがが婦人方”
③スティーブ・アントニー『女王さまのぼうし』	
⑤谷川彰英『国際理解にやくだつNHK地球たべもの大百科5 イギリス お茶とケーキ』	④H. パーセル “トランペット・チューン”
⑥銀城康子『イギリスのごはん』	
⑧マイケル・ボンド『くまのパディントン』(パディントン駅の写真を提示)	⑦ビートルズ “オブラ・ディ・オブラダ”
⑨J.K. ローリング『ハリー・ポッター シリーズ』(キングスクロス駅の写真等を提示)	⑩J. ウィリアムズ “ヘドウィグのテーマ”

(7) テーマ「あめ・雨」学級教室 Cタイプ

図書	音楽
②征矢清, 林明子『はっぱのおうち』	①ラヴェル “水の戯れ” (ピアノ: マルタ・アルゲリッチ)
③ウィリアム・スタイク『ビッツアぼうや』	
④アンジェラ・ウィルクス『雨の日がたのしくなる本』	
⑥さくらいじゅんじ, いせひでこ『にじ』	⑤ドビュッシー “雨の庭” (ピアノ: アルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリ)
⑦ピーター・スピア『雨、あめ』	
⑧ユリー・シュルヴィッツ『あめのひ』	
⑨アルビン・トゥレッセルト, L・ワイスガード『あまつぶほとりすぶらっしゅ』	⑩“あめふりくまのこ” (歌唱)
⑩トミー・ウンゲラー『あおいくも』	

(8) テーマ「やさしいオオカミだっているんだよ」図書室・学級教室で実施 Dタイプ

図書	音楽
②たかどのほうこ『つんつくせんせい どうぶつえんにいく』	①サン・サーンス “動物の謝肉祭” より “フィナーレ” (ピアノ: アルゲリッチ, ヴァイオリン: ギドン・クレメル他)
④アンソニー・ブラウン『ゴリオとヒメちゃん』	③ルロイ・アンダーソン “ワルツィング・キャット” (指揮: ルロイ・アンダーソン)
⑤おざわとしお, 赤羽末吉『かちかちやま』	
⑦きむらゆういち『うさぎのおいしい食べ方』	
⑧グリムの昔話, ホフマン『赤ずきん』	⑥プロコフィエフ “ピーターと狼” より “狼あらわる” (指揮: ズービン・メータ, イスラエルフィル, 語り: パールマン)
⑨グリムの昔話, ホフマン『おおかみと七ひきのこやぎ』	
⑩内田麟太郎, 降矢なな『ともだちくるとかな』『あしたもともだち』	
⑪石田真理『オオカミくんはピアニスト』	⑫パーシー・グレインジャー “花のワルツにもとづくバラフレーズ” (ピアノ: マーティン・ジョーンズ)

*齊藤・吉岡が作成したリストを杉山が手直し、再度確認していただいた。

【表3】音楽ブックトーク活動案 「曲と楽器と物語」

学習活動	●指導上の留意点 ★評価
<p>♪G 線上のアリア (管弦楽組曲第3番《アリア》と同曲) 演奏: バイヤール室内管弦楽団</p> <p>♪ 管弦楽組曲第3番より《アリア》/J.S.Bach 演奏: イル ジャルディーノ アルモニコ</p> <p><u>1. 「音楽ブックトーク」に誘う</u></p> <p>○流れていた音楽に気付いたかな</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この曲知ってる ・どこかで聞いたことある ・バイオリンで弾いているんですよ <p><u>2. 音楽と物語をむすんでイメージを広げる</u></p> <p>○この音楽が流れてくる本を紹介します</p> <p><input type="checkbox"/> 『Four (フォー)』『第二音楽室』 (司書: あらすじ紹介)</p> <p>○リコーダーにはこのような種類のものがあるんだよ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きいのは(バス)はどうやってふくの? ・合わさるととってもきれいな音がするね <p>♪ 管弦楽組曲第3番より《アリア》/J.S.Bach 編曲および演奏: アマチュアの録音</p> <p><input type="checkbox"/> 再び 『Four (フォー)』『第二音楽室』</p> <p>○こういうのは聴いたことあるかな?</p> <p>♪ 《Watermelon Man》 演奏: Big fat Jazz Band</p> <p><input type="checkbox"/> 『きらめいてハッピー・ジャズ』 (司書: あらすじ紹介)</p> <p>○みんなはパイオルガンって知ってるかな</p> <p>♪ 《トッカータとフーガ ニ短調》/J.S.Bach 演奏: トン・コープマン (DVDで冒頭部分を視聴)</p> <p><input type="checkbox"/> 『聖夜』 (司書: あらすじ説明)</p> <p>♪ O. メシアン “主の降誕” 演奏: Thomas Trotter</p> <ul style="list-style-type: none"> ・難しそう ・こんなの中学生に弾けっこないよ! ・最後まで聴きたい! <p><u>3. 新しい読み方・聴き方の勧め</u></p> <p>○物語に出てくる音楽を聴くと、描かれているものももっと豊かに感じられ、音楽もその主人公の耳になって聴くと、今まで聞こえてこなかった新しい発見があるものだよ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・曲を知らなくても読めるけど、知ってよんだらもっと楽しいと思った ・図書室の先生と音楽の先生が一緒に授業するのでびっくりした ・そういう本を今度探してみようと思った 	<p>●子どもたちが入室するときに静かに音楽を流しておく</p> <p>●「音楽ブックトーク」は始めるにあたって、以前に紹介した本や曲を思い起こせるようにする</p> <p>●《G 線上のアリア》の解説をする</p> <p>●本と同じ演奏形態の音源を用意し、先の原曲の演奏との音色の違いに気づけるようにする</p> <p>●4種類(ソプラノ、アルト、テノール、バス)の他に、ソプラニーノ、クライネソプラニーノ、コントラバスのリコーダーがあることも紹介する</p> <p>●それぞれの楽器で《アリア》の冒頭部を演奏し、楽器の音色の違いがわかりやすいようにする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バスリコーダーの解説をする ・指が届かないので、金具がついている ・管がついているのは、ファゴットと同じ、等 <p>●本に描かれている学校の中で演奏される、子どもの演奏という設定に着目して、次の本の紹介に移る、</p> <p>●「クラスの皆で取り組む音楽演奏」という点をつけて、紹介する</p> <p>●ジャズの説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビッグバンドで使われる楽器 ・即興演奏の楽しさ <p>●「楽器のいろいろ」という点でつなげ、ふだんなかなか接することのないパイオルガンを紹介する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教会によくあるのだけれど、教会に行ったことある人はいるかな ・たくさんパイプがあって、そのパイプは一音一音に大きなリコーダーがついているようになっているので、ものすごく大きい楽器になっているんだ <p>●物語の主人公が挑戦した難曲について、作曲家、題名、曲の感じ(現代曲の特徴)について説明をする</p> <p>●終始教師が本や音楽を紹介してきたので、この時間で感じたことをインタビューする</p> <p>★物語と音楽を並べて鑑賞することに興味をもてたか</p> <p style="text-align: right;">[学習感想への記述]</p>

*作成者: 齊藤豊

【表4】音楽ブックトーク活動案「やさしいオオカミだっているんだよ」

学習活動	●指導上の留意点 ★評価
<p>1. 「音楽ブックトーク」に誘う</p> <p>○ この曲を聴いてどんな気分になるかな？</p> <p>♪ 《動物の謝肉祭》よりフィナーレ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わくわくする ・遊園地みたいで賑やか ・サーカスが始まるよって感じ <p>□ 『つんつくせんせい どうぶつえんにいく』(読み聞かせ)</p> <p>2. 曲想と動物の様子をむすぶ</p> <p>○ この曲の猫はどんな猫かな？</p> <p>♪ 《ワルツィング・キャット》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お城にいる猫みたい、だって豪華な感じがしたから ・ふかふかの絨毯の上で踊っていると思う。ゆっくりな曲だからふかふかしている絨毯のイメージがした ・スケートしている猫。(旋律が) 流れるような曲だから、すうっと氷の上を滑っているように感じた ・しっぽが長い猫だと思う。“にゃ～お”って聞こえるところで、猫がなきながらしっぽをくにゃっとしてるみたいだから <p>□ 『ゴリオとヒメちゃん』(物語紹介)</p> <p>□ 『かちかちやま』(物語紹介)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・たぬきって悪いけど、ウサギの方がもっとひどいと思うなあ <p>○ これはどんな動物に聞こえるかな？</p> <p>♪ 《ピーターと狼》より「狼あらわる」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・怖い感じがするからトラかなあ ・ホラー映画みたい。だんだん近づいてくる感じがするもの <p>□ 『うさぎのおいしい食べ方』(物語紹介)</p> <p>□ 『赤ずきん』(物語紹介)</p> <p>□ 『おおかみと七ひきのこやぎ』(物語紹介)</p> <p>□ 『どうぶつえんガイド』よりオオカミ(場面提示)</p> <p>3. 物語と音楽をむすんでイメージを広げる</p> <p>○ やさしいオオカミっていないのかな</p> <p>□ 『ともだちくかな』(本紹介)</p> <p>□ 『あいつとももだち』(本紹介)</p> <p>□ 『オオカミくんはピアニスト』(読み聞かせ)</p> <p>♪ 《花のワルツにもとづくパラフレーズ》</p> <p>○ オオカミくんは、このあとどのような曲を弾いてあげるのだろうか</p>	<p>●テーマについての想像を楽しめるように提示する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・曲想からどのようなイメージを感じたかを交流し、ブックトークのテーマと音楽をつなぐ手がかりをつかめるようにしたい <p>●お話を楽しめるよう、絵が見えるように提示する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・細かいことを指示せず、お話が進むにつれて子どもたちが物語に入ってこられるようにする <p>●1学期の活動をふり返りながら、動物の気持ちや、その動物らしさを引き出す</p> <p>●音色や旋律、音楽の速さから感じる猫の姿を交流し、曲を聴く手がかりをつかめるようにする</p> <p>●場面が一転してゴリラがこのあと仲良しの猫のヒメちゃんとうなっていくのだろう、という期待をもてるように紹介する</p> <p>●動物が悪者としてイメージされるお話を紹介する。とくに悪者としてイメージされているオオカミに焦点が徐々にあたるように本の紹介を進める</p> <p>●子どもたちと対話をしながら、音色と動物のイメージがつかがるようにする。また、音を出している楽器の写真を提示し、より興味をもって聴けるようにする</p> <p>★曲想と描かれているオオカミの姿をつなげて聴くことでイメージが広がり、音楽を楽しんでいる</p> <p>●悪者として描かれているオオカミが登場する物語を紹介する</p> <p>●オオカミを紹介する本を提示し、オオカミの本来の姿を知ることができるようにする</p> <p>●優しい心のオオカミを紹介しつつ、場面から聞こえてきそうな音楽を鑑賞できるようにする</p> <p>●読み聞かせの流れの中に音楽を入れる</p> <p>●最後の問いかけのあとは、交流を促さず、それぞれが物語の続きを想像できるようにしたい</p>

*作成者：齊藤豊

したがって音楽ブックトークとは、音楽教員自らが多くの音楽鑑賞を迫られる活動ともいえる。

4. 考察

ここまで音楽科教育と図書館界の鑑賞教育における歴史的経緯を概観し、現在1つの小学校で行われている学校司書と音楽教員の協働活動を見てきた。日本図書館協会と全国学校図書館協議会が、1951年の学習指導要領のレコード資料と図書資料の選択に協力していたことが新たにわかった。その目録では、演奏形態や楽曲など数種類の標目でとられ、授業で利活用されることを想定したものであることが推測された。1958年以降は音楽科鑑賞教材が共通化され、校内で多種類のレコードが必要とされなくなったことがわかった。

それでは、これからの学校図書館が鑑賞教育を支援し得るかについて、以下、音楽ブックトークの活動をふまえながら3つの可能性について述べていきたい。

可能性の1つは、人的支援である。学校司書あるいは司書教諭が、音楽教員あるいは音楽の授業を担当する教員に音楽文化の存在を別の角度から提示することで、新たな教育活動の可能性が考えられる。たとえば音楽が登場する児童文学を知るということは、限定された曲を鑑賞させることに慣らされてきた音楽科教員にとって、他の文化領域における音楽の拡がりを知ることになる。インタビューからは、齊藤教諭が吉岡司書の「めくるめく」出てくる児童書の知識や、それぞれの教員に「カスタマイズ」した本を紹介する技に触発されていることがみてとれた²¹。学校司書や司書教諭が、教員と対話を重ねながら個別具体的に図書を提示すること、すなわち「対話と説得のプロセスを通じて、“教師集団”との一致点を見出す」[坂田・河内 2012] 姿勢は、学校図書館の今後を考えるうえにおいても重要である²²。

2つめは、「場」の支援である。ここでいう「場」とは、久野 [2017] のいうように「場所」のみならず、過ごす「時間」も含めた意である。音楽ブックトークで最も注意したい点は、騒音のない場を用意することである。しかしながら小学校低学年の音楽授業は、多くの場合普通教室で行われ、音楽を傾聴するという環境、すなわち無音状態を作ることが至難の業のように思われた。たとえ全員が私語を止めて身動き一つせずにしたとしても、隣の教室から漏れ聞こえる声や、あるいはグラウンドからのホイッスルの音を止めることはできない。近年みられる、教室の壁をとり払ったオープン教室であれば、無音はゼロに等しい。それに比べて特別教室として設置される図書室は、普通教室と少し距離を置いている場合が少なくない。オープン仕様の図書室の場合はこれに当てはまらないので不向きであるが、ドアや壁のある通常の図書室の場合、敷き詰められた多くの本によって外部の喧騒をある程度遮断することができるのではないだろうか²³。静かにすることを求められる図書室の機能が、逆に音楽鑑賞に活きるのである。公共図書館や大学図書館の職員からすれば、図書室で音楽鑑賞というのは他の利用者に迷惑がかかるのでは、と危惧するかもしれない。しかし学校図書館は、他の図書館にはない機能、すなわち「教育課程の展開に寄与する」²⁴役割が良くも悪くもあり、授業の間はそのクラス専用の空間である。したがっ

で、聴く「場」としての機能活用は、学校図書館であれば可能である。尚、ここで求める傾聴とはあくまで音楽を聴きとることであり、精神性を求めるものではないことを強調しておきたい²⁵。

3つめは、再生機器の支援である。先に述べたように、子どもたちに聴かせるためには、音質の観点から最低でもミニコンポが必要となるであろう。ただし、公共図書館のように視聴ブースをいくつも設置したり、音楽室のように大型ステレオセットを購入したりする必要はないため、スペース的、予算的にも実現は不可能ではないと思われる。

残る問題は音楽鑑賞のための視聴覚資料の用意である。CDやDVDなどは、予算が確保できる学校図書館であれば一定程度購入可能な一方で、多くの公立小中学校図書館では、図書を更新する予算で精一杯というのが現状と思われる。さらに、音楽資料に特化した図書館技術はすでに音楽大学などの高度に専門化した音楽図書館²⁶の領域となっており、かつてのような小中学校の音楽教育に特化した目録化の技術や音楽知識は、多くの学校図書館に継承されていない。つまり、音楽資料の購入や選別をすぐに小中学校図書館に求めるのは、物的にも技術的にもたいへん困難である。他方で、音楽科教育には大量の音楽資源とその知識がある。そこで考えられるのが、音楽知識のある音楽科教員が音楽リソースを提供し、その目録化を学校図書館が担うという、音楽ライブラリーの創設である。これは施設を新たに設けるのではなく、各教室を活用しながら情報資源を提供する機能で、1960年代初めに各専門教科領域の分館構想として提案されていた²⁷。すでに吉岡司書は、音楽室の一角に楽譜などの音楽専門誌を置いて子どもたちに提供している。つまり音楽科教育側と学校図書館の協力如何で、音楽室が視聴覚資料・印刷資料を問わず音楽リソースを提供する音楽ライブラリーとして機能する可能性は十分にある。

では、子ども自身が音楽リソースにアクセスするためには、どのような方策が考えられるだろうか。個人で自由な時間に視聴するのであるなら、利便性や経済的観点から音楽配信サービスの導入が現実的であろう。ただし、検索語を要する配信サービスが有効に活用されるためには、作曲家や曲名、あるいはイメージする言葉などの入力が必要となる。そこに、音楽作品を知らせたり対話を重ねたりする音楽ブックトークのような活動が活かされるのではないか。ただし、教員や司書はあくまでも作品を伝えることに努め、子どもたちの感想やイメージに介入しない細心の注意が払われる必要があることは言うまでもない²⁸。

5. おわりに

本稿で紹介した音楽ブックトーク活動は、都市部にあり、かつ文化資本が比較的高いと想像される家庭環境の子どもたちが通う学校における実施であるため、一般の学校における実証性や汎用性については不可視であることを指摘せねばならない。音楽聴取の機会を拡げる意義から考えると、むしろ多様な音楽文化に触れることの少ない地域や学校においてこそ必要な活動と思われる。実施にあたっては、学校図書館との連携が示されている総合的な学習の時間内等で扱うことが、現在のところ有効であると考えられる²⁹。

音楽ブックトークは、これまでの学校教育で子どもたちに「聴く自由」およびそのための環境が整備されてこなかったという事実をわれわれに突きつけるとともに、新たな教育

活動を学校図書館がサポートし得る実例を見せてくれる。初めの一步としては、音楽教員が学校司書あるいは司書教諭に声をかけて本の読み聞かせ等を依頼することから始めてみる、あるいは学校司書や司書教諭側から、物語に登場する音楽について音楽教員に問いかけてみることもかもしれない。異なる文化を互いに傾聴することを、まずは大人の側から実践していくことが必要だと思われる。

学校音楽にとどまらず、多くのジャンルの音楽リソースを児童生徒や教職員に提供する音楽ライブラリーについては、これからも可能性を探っていきたい。また、本稿では学校図書館の歴史に深く立ち入ることができなかった。学校図書館で視聴覚資料が等閑視されていく過程は、戦後の読書指導の問題と不可分にあると思われる。戦時からの経緯を含めて、今後の課題としたい。

謝辞

英文タイトルには、翻訳家の吉岡沙恵氏および東京学芸大学附属世田谷小学校の森尻彩教諭にご協力いただいた。

注

- 1 同音楽祭では現代音楽も演奏されているものの、ここでは一般に使われている「クラシック」という言葉を使用した。伝統音楽と区別する音楽の呼称には、「20世紀音楽」[宮下 2006] や「シリアス音楽」[日本戦後音楽史研究会 2007] などの呼称が提言されている。
- 2 小学校音楽の学習指導要領の「目標」には、第1次から2017年3月に告示された第9次まで、「情操」と「心情」という言葉が継承されている。歴代の学習指導要領は、学習指導要領データベース委員会のサイトで参照できる。新指導要領については文部科学省の「小学校学習指導要領平成29年告示」を参照。http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf (2017/10/04最終閲覧)
- 3 文部科学省「平成29年度からの学校図書館関係の地方財政措置について」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/03/22/1360321_4.pdf (2017/10/04最終閲覧)
- 4 文部科学省「平成28年度「学校図書館の現状に関する調査」の結果について」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/_icsFiles/afieldfile/2016/10/13/1378073_01.pdf (2017/10/04最終閲覧)
- 5 文部省「小学校学習指導要領音楽科編(試案)昭和26年(1951)改訂版」国立教育政策研究所内学習指導要領データベース作成委員会『学習指導要領データベース』
<http://www.nier.go.jp/guideline/s26eo/index.htm> (2017/10/04最終閲覧)

- 6 文部省「中学校高等学校学習指導要領音楽科編（試案）昭和26年（1951）」国立教育政策研究所内学習指導要領データベース作成委員会『学習指導要領データベース』
<http://www.nier.go.jp/guideline/s26jho/index.htm>（2017/10/04最終閲覧）
- 7 前掲5
- 8 前掲6
- 9 文部省「学習指導要領 音楽編（試案）昭和二十二年度」国立教育政策研究所内学習指導要領データベース作成委員会『学習指導要領データベース』
<http://www.nier.go.jp/guideline/s22ejo/index.htm>（2017/10/04最終閲覧）
- 10 たとえば、文部省「小学校学習指導要領昭和33年改訂」音楽「第3指導計画作成および学習指導の方針」では、次のように示されている。「各学年で具体的な曲名を示した3曲の鑑賞教材は、その学年で特に重点的に取り扱い、児童の愛好曲目として身につけさせるようにする」。国立教育政策研究所内学習指導要領データベース作成委員会『学習指導要領データベース』
<http://www.nier.go.jp/guideline/s33e/chap2-5.htm>（2017/10/04最終閲覧）
- 11 西島の作成による戦後日本の「鑑賞教材一覧表」がwebで公開されている。いくつかは省略されているものの、指導要領における鑑賞曲が時系列的変遷でまとめられている。西島千尋「鑑賞教材一覧表」
<http://www.shin-yo-sha.co.jp/link/Kanshow-kyozai.pdf>（2017/10/04最終閲覧）
- 12 同上
- 13 ポストンを拠点とした教育出版社ジン・アンド・カンパニーが1926年に出版したコロムビア・プラン『MAS (Music Appreciation in the Schoolroom)』からの選曲は、ビクターの影響が強いなかにおいて主流になりえなかったのでは、との見方がある〔西島2010〕。
- 14 総務省統計局編集『日本統計年鑑 第66回（2017）』（総務省統計局2016）による。
- 15 インタビュー（261ページの吉岡の発言）を参照。「流行りのものじゃないっていうのかな…児童書専門の本屋さんがあって、普通の本屋さんに並んでない本、をいっぱい入れているんです」。
- 16 インタビュー（262～263ページの齊藤の発言）を参照。「前お話ししたかと思うけど、「いろはにほへと」ってどこから出てきたの？ってみたいな話をちょっと聞いたら、もう図書館中の人やって来て、もう次から次へ、もう嬉しそうに顔して本持ってきて、ここにありました！って言って…みるみるうちに本がこうやって目の前に積まれていくの。いやあすいません、皆さんにこんなにお手数おかけしてしまって言ったら、いやいやこういうことを聞いて欲しかったって、すごい言ってもらったんですよ…洗足図書館。」「ずいぶんあそこには通ったんです」。
- 17 ブックトークを図書館活動として積極的に導入したのは、岡山市の学校司書たちとされている。1974年の『学校図書館』9月号でブックトークの記事が掲載されたことをきっかけとして、岡山市の学校司書で作るサークルでは1977年から本格的な研究に着手する。岡山市の学校司書たちによって出版された『ブックトーク入門』〔岡山市学校図書館問題研究会編1986〕から、公共図書館の児童図書館員たちはブックトークの意義と方法を掘んでいった〔児童図書館研究会1992〕。

- 18 「[音楽ブックトーク] 学習活動案より」東京学芸大学附属世田谷小学校 夏の教育研究セミナーにおける配付資料。本稿の掲載には齊藤教諭の許可を得ている。
- 19 同上
- 20 「小学校学習指導要領平成29年告示」の「音楽」の第3「指導計画の作成と内容の取扱い」2(1)ア」の部分である(前掲2)。
- 21 インタビュー(262ページの齊藤の発言)を参照。
- 22 坂田は、学校図書館員における図書の推薦が、自由市場主義と価値主義への「無限ループ」へ陥ることの危険性を指摘している。図書館が一定の価値にコミットメントすること、さらにそのことに無自覚的であることを厳しく問うのである。坂田の指摘に本稿で応答するのは困難であるが、筆者は、図書館を担う者が価値中立的であることの限界を自覚しつつ、他者と対話しながら異なる価値選択を採り入れていくことが重要だと考える。音楽ブックトークの例でいえば、吉岡司書は齊藤教諭の要請により選書領域を拡げ、齊藤教諭もまた吉岡司書の選書を受けて選曲領域を拡げていた。緊張感をもちながら相互に触発し合う試みは、坂田の要求する「一致点」に接近するのみならず、教職員が自らの授業研究や教育活動を深めていく機会を持つことができると思われる。
- 23 本来であれば図書室は、子どものアクセスを優先し、教室や玄関から遠く離れた場所を避ける必要があるため、普通教室からの隔離を推奨しているわけではない。
- 24 学校図書館法の第二条。
- 25 かつて「学習指導要領音楽編(試案)昭和二十二年度」(前掲9)の「鑑賞用音楽レコード一覧表」には「レクリエーション」の選曲があり、「静思の時間」「瞑想の時間」「悦楽の時間」といった項目が並んでいた。
- 26 1990年代には、音楽大学図書館が一般大学図書館をモデルとしてきたことへの問い直しや、西洋音楽中心論からの脱皮など、音楽図書館としての自立が模索されている[音楽図書館協議会1995]。
- 27 杉山論文[2014]を参照されたい。他にも、1960年代に深川恒喜が、上から与える「教材」とそれ以外の「資料」という言葉を区別し、児童生徒がこれらを使う場としての学校図書館を提案している。このとき、レコードプレーヤーやイヤホンを置いた音楽鑑賞施設を設けることが意見された[松尾ほか1961]。
- 28 ここで考えなければならないのは、評価の問題である。筆者は、子どもたちの音楽イメージを評価に組み入れることに反対の立場である。なぜなら、本来自由な意思の表出であるはずの「感想」が評価の対象となることによって、教師の意図に沿う発言を強制的に生み出す可能性があるためである。この点は、読書推進のつもりが結局読書嫌いを助長すると指摘されている読書感想文指導が反面教師になると思われる。尚、読書感想文や課題図書の問題に関しては、八木[2009]の先駆的研究がある。
- 29 平成29年度改訂の学習指導要領(前掲2)の総合的な学習の時間の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」では、次のように記載されている。

(7) 学校図書館の活用, 他の学校との連携, 公民館, 図書館, 博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携, 地域の教材や学習環境の積極的な活用などの工夫を行うこと。

参考文献

- 秋吉美都 「「みんな」が好きな曲はあるのか」『データで読む現代社会 ライフスタイルとライフコース』新曜社, 2015, p.55-70.
- 上野正道 「デュイにおける美的経験の再構成：公共性の基礎としての芸術」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第42号, 2003, p.283-291.
- 海老澤敏ほか監修『新編音楽中辞典』音楽之友社, 2002.
- 岡山市学校図書館問題研究会編『ブックトーク入門：子どもが本を好きになるために』教育史料出版会, 1986.
- 小川昂『レコードはいかに整理するか：家庭・学校・図書館』音楽之友社, 1950.
- 小川昂「学校図書館におけるレコードの整理について」『学校図書館』第19号, 1952, p.25-29.
- 音楽図書館協議会編『音楽情報と図書館』音楽図書館協議会, 1995.
- 荻谷剛彦『階層化日本と教育危機：不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂高文社, 2001.
- 荻谷剛彦『教育改革の幻想』筑摩書房, 2002.
- 久野和子「児童図書館、子ども図書館、学校図書館におけるトリニティの変遷：重層的な「場」としての子どもの読書空間に着目して」『現代の図書館・図書館思想の形成と展開』川崎良孝・吉田右子編, 京都図書館情報学研究会, 2017, p.173-208.
- 齊藤忠彦・杉山厚志「中学校音楽科における鑑賞教材選択の視点と教材例」『信州大学教育学部紀要』第114号, 2005, p.37-46.
- 齊藤豊「オペレッタじごくのそうべえ」『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』http://www.u-gakugei.ac.jp/~schoolib/htdocs/?page_id=17 2009 (2017/10/04最終閲覧)
- 齊藤豊「子どもの活動意欲に着目した音楽の授業デザイン」『音楽教育実践ジャーナル』第13巻第2号, 2016, p.54-65.
- 坂田仰, 河内祥子編著『教育改革の動向と学校図書館』八千代出版, 2012.
- 児童図書館研究会『ブックトーク』児童図書館研究会, 1992.
- 塩見昇, 間崎ルリ子共著『学校図書館と児童図書館』雄山閣出版, 1976.
- 渋谷清視ほか「青少年読書感想文全国コンクール30年を迎えて」『学校図書館』第412号, 1985, p.9-16.
- 杉山悦子「音楽教育を支援する学校図書館の機能：1950年代におけるレコード資料の取扱いとその活用」『音楽教育実践ジャーナル』第11巻第2号, 2014, p.166-177.
- 高野麻衣「クラシックの「はちゃめちやな1日」：ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポンの10年」『新潮』第33巻第5号, 2014, p.110-115.
- デュイ、ジョン『経験としての芸術』栗田修訳, 晃洋書房, 2010 (1934).
- 中山美由紀「東京学芸大学における「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」の展開と可能性」『図書館界』第63巻第4号, 2011, p.314-319.
- 西島千尋『クラシック音楽は、なぜ〈鑑賞〉されるのか：近代日本と西洋芸術の受容』新

- 曜社, 2010.
- 日本戦後音楽史研究会編『日本戦後音楽史：戦後から前衛の時代へ・1945-1973』平凡社, 2007.
- 日本ユニセフ協会「子どもの権利条約」https://www.unicef.or.jp/about_unicef/about_rig.html (2017/10/04最終閲覧)
- 松尾弥太郎ほか (座談会)「教材センター論をめぐって」『学校図書館』第127号, 1961, p.8-24.
- ブルデュー、ピエール『ディスタンクシオン：社会的判断力批判 1』石井洋二郎訳, 新評論, 1989 (1979).
- 宮下誠『20世紀音楽：クラシックの運命』光文社, 2006.
- 宮寺晃夫『再検討 教育機会の平等』岩波書店, 2011.
- 八木雄一郎「読書感想文問題史：『学校図書館』誌上における論争から」『文教大学国文』第38号, 2009, p.35-46.
- 吉岡裕子「4年2組『先生！しらべにきました』理科の単元『季節と生物』」『かくと：学校図書館問題研究会機関誌』第30巻, 2014, p.74.
- 吉岡裕子・遊佐幸枝監修『発信する学校図書館ディスプレイ：使われる図書館の実践事例集』少年写真新聞社, 2015.
- 渡辺裕『聴衆の誕生：ポストモダン時代の音楽文化』春秋社, 1989.

【インタビュー】

実施日：2014年9月12日

場所：東京学芸大学附属世田谷小学校音楽準備室

インタビュー対象者：吉岡裕子学校司書・齊藤豊音楽教諭

聞き手：杉山悦子

括弧内は、筆者が補足している。本文・注で取り上げた部分は、下線で示した。

吉岡：小学生の時に養っておかなくちゃならないな、ってすごく思うんですよ。それは私たちの入っている研究会なんかでもそうなんだけど、中学・高校生になると、『秘密の花園』『若草物語』でも、それってなあに？っていう人がいるのよね、という話をよく聞いて…。

杉山：翻訳もの、ということですか？

吉岡：翻訳ものがすごく苦手なのよね、中学高校になると。やっぱり、小学校のときにそういうのってというのはたくさん出会ってきたらそういうことがないんじゃないかな。

杉山：翻訳ものは難しいんですか？

吉岡：何が難しいかというと、名前が難しいんだと思いますね。

杉山：カタカナ？

吉岡：それから…想像力でしょかね。たとえばどういう地域や…想像力を豊かにしておくってことは、小さいときに養っておかないとできないわけなんですよ。今『赤

毛のアン』は読まれてますけど、しばらく『赤毛のアン』とかってほとんどみんな読まれなかったみたいだし…私なんかも子どものときにいっぱい翻訳ものを読んできたけど、それ自分の想像力で読んでいますよね。

杉山：なるほど、実際に目にしていないから…

吉岡：たとえば『メアリー・ポピンズ』でも、『くまのプーさん』でも、何でもそうやって読んできて…大人になってその場所に行ったときに、ああこれかって思うようなことってあるじゃないですか。メアリー・ポピンズを読んだとき、ロンドンの街に煙突がこう立ってて、とかいうのって、大人になって初めてロンドンに行って、ああこれがこういう街だったのねっていうのがそこで、いっぱいそういう経験があるような気がして…

杉山：いっぱい本が読まれてても、最近の日本人が書いた作品が結構多くて、実は翻訳ものとかっていうのは読まれてなかったりって？

吉岡：実は読まれてない、というか読まれてない、という話をよく聞くっていう感じ。それが何の理由かはわからないんですけど、私は小学生のときにそういうのを読もうねっていう感じでやっていきたいなって思って…たとえば3年生と4年生には私がリストアップした「チャレンジ」っていうのをやっているんですけど、読んでも読まなくてもいいんだけど、「この本読んでみたら」みたいな感じでやっているんですね。その中には結構、流行りのものじゃないっていうのかな…児童書専門の本屋さんがあって、普通の本屋さんに並んでない本、をいっぱい入れているんですけど、そういう「チャレンジ」っていうのをやってたりして、読んで自分たちで「読書ノート」に書いてくるっていうことを3年生4年生に今やっているんですね。読まない子はほんとに読まないんですよ、だから。でもそれはいいなって思って。ただそれをやろうねっていう風に言って。

杉山：そうすると、読みたい本を読ませるだけではない、っていうのが学校図書館の…

吉岡：読みたい本というのが何か、っていうところですよ、小学校のときに。それは結構、流行りの本だったりしてますよね。だから今までいろんなことやってきて、あ、「読みたい本」って結構そういうもんだなって。だから実はウチは『かいけつゾロリ』は、フェードアウトして、ほとんど無いんですよ。2、3冊しかないんですよ。壊れたらそれで終わりって感じにして。新しいのは買ってないんですね。

杉山：リクエストはないんですか？

吉岡：ないです。

杉山：もう卒業したっていう感じですか。

吉岡：もう卒業したかどうかはわからないんですけど。自分で買ってるかもしれないし、(ここで齊藤教諭が入室) 近くの図書館をいっぱい利用しているので、そこで読んでいるんじゃないかと思うんですけど、だけど、たまに背中を押してあげることが必要かなって思ってるんですね。

杉山：そうすると、学校司書には何が必要でしょうか。

吉岡：だから、学校図書館に勤めるって、学校司書というのは一般的な司書とは違うスキルが必要かなって思うところがあります。

杉山：たとえば…本の知識はそうだと…

吉岡：たとえば、ブックトークも一般的なブックトークではなく、教科とかいろんなことにどう連携していかってということは違うかなって思う。知っている子たちにブックトークするので。

齊藤：あの…学校司書と一般の司書の違いって、僕はね、「人」とできるっていうことが大きいかなって思う。いつも会っている人だから、余計その難しさがある気がするんですよ。あの、なんだろう…一見さん、っていうか…市民であっても、図書館っていうと市民だったりとか…ま、大学図書館だとまた違うかもわかんないけど、一般に開かれているところだとすると、誰が来ても、いつも同じ人が来るわけじゃないんだけど、学校司書だと毎日同じ子どもが来たりとか、毎日同じこの箱の中にいる人たちで、先生もよく知っているっていう…その難しさ、人と人だからそういう難しさがすごくあるかな、良さもすごくあるんだけど。

杉山：学校司書さんは、公共図書館の専門プラスコミュニケーション力みたいな…

齊藤：そうそう、そこがすごく大きいよね。

杉山：じゃ、たくさんやることが…

吉岡：すごいあるんです。

杉山：ありますよね。

吉岡：だから、この先生はこういうことがやりたいと思うのがなんとなく私の中であって…じゃこの本買ったならこの先生使えるのかなっていうのが…割とね。ねっ？

齊藤：はい。多分、「人」だから、得意不得意があると思うんだけど、レンジが広ければ広いほど、その先生にカスタマイズした本を選んでいけるっていうか。僕はまったく本のことわかんないけど、あたかも自分が本のことを知っているような気がして(笑)、〔吉岡〕先生のおかげで(笑)。絵本だって、自分じゃ絶対この本出てこないよ、っていうのが、もうめくるめく出てくる…

吉岡：たまにね、とても面白い本があるんだよって〔齊藤先生が〕言うと、あ、それありますとかって言うのよね(笑)。

杉山：それが快感だったりして？

吉岡：快感。それが快感。

齊藤：これ知ってる？とかってね、聞きかじって、どうよ？って持って行くと、あー(本を取り出すマネをして)もうがっかり。勝ち誇ったようなね？

杉山：どや顔？

齊藤：まさにどや顔(笑)。

吉岡：ほんと。だから先生たち20何人かなんかの、大体この人はこれが好きだな、っていうのも何となくわかったり、こういう授業するなっていうのがわかっているから、どうお？っていう風に持ってって、へえ、こんなのってあったのって言われるのがすごく快感。それって、大学の図書館の司書さんとか、公共図書館の司書さんは、それはないだろう、とかって思うんですよ。

齊藤：それは何ていうの、喜び…なんですよ。公共図書館でもあるだろうけど、でも僕が聞いたところによると、それは少ないって話はしましたね、洗足の図書館なんかは。前お話したかと思うけど、「いろはにほへと」ってどこから出てきたの？ってみたいな話をちょっと聞いたら、もう図書館中の人が出て来て、もう次から次へ、も

う嬉しそうな顔して本持ってきて、ここにありました！って言って…みるみるうちに本がこうやって目の前に積まれていくの。いやあすいません、皆さんにこんなにお手数おかけしてしまって言ったら、いやいやこういうことを聞いて欲しかったって、すごい言ってもらったんですよ…洗足図書館。

杉山：公共図書館…

齊藤：まさに公共図書館。それを機に、ずいぶんあそこには通ったんです。いいの？聞いてちゃっていいの？みたいな。

(雑談・中略)

吉岡：息子が小学生のときにアメリカに初めて行って、メトロポリタン美術館に行って、ゴッホの絵を見たときに、この絵上手だねって言ったのが、私すごく印象的で。大人になっても彼はゴッホが好きなんですよね。それはね、小さいときにいろんなことを味わって私どんなに大事かってほんとに思ってた。本もそうなんですよ。小学校のときに浴びるようにいい本を味わわせてやりたいなっていうのがあって。音楽も一緒に、いつも流れているのは、テレビから流れているのはJポップみたいのが多いし…

杉山：ここでしか聴けないですよ、普通クラシックとかって。

吉岡：この間、別のクラスで、担任の先生と一緒に聴いてくれて、小学生にこんないい音楽が聴ける、この子たち幸せだな、とか言ってくださって。

(後略)

Received : October, 4, 2017

Revision received : November, 21, 2017

Accepted : December, 6, 2017